

稱讃

二四〇号

二〇二二年十二月一日発行



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二二年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

仏法には無我と仰せられ候ふ。われ
おも
と思ふことはいささかあるまじきこと
なり。われはわろしとおもふ人なし、
しょうにん
これ聖人（親鸞）の御罰なりと、
おんこぼそうろ
御詞候ふ。他力の御すすめにて候
ふ。ゆめゆめわれといふことはありま
そうろ
じく候ふ。無我といふこと、
ぜんじゅうしょうにん
前住上人（実如）もたびたび仰せら
れ候ふ。

『蓮如上人御一代記聞書』
『註釈版聖典』一二五七頁

今回の『寺報』二四〇号の二頁に大峯頭
師著の『生命環流』で述べられている「信
心の人には我というものはありません。煩
悩はあっても我がないのです。ここをしつ



かり味わいたいものです。」を掲載させて
いただいております。「ここをしつかり味

わいたいのものです」とおっしゃっているこ
とに、どう味わったらいののでしょうか。
「無我」と言われると、「諸法無我」を思い
起こします。「諸行無常」「一切皆苦」
「涅槃寂靜」の四法印の一つです。全ての
ものは因縁によつて生じたものであり、実
体（我）がないということを悟ることであ
ります。それに対して、悟りに至れない私
たちは、「煩惱」を持つており、「我執」「我所
執」と言うように、「自分が」「自分の」に囚わ
れる者なので、「煩惱」「我」と思っていま
した。一方、「無我」だから「輪廻転生」する
との考え方がありますが、「無我」と分かっ
てないからこそ、「流転輪廻」すると思ひ込
んではないのでしょうか。仏・無為涅槃は
「常・楽・我・浄」と言われ、仏のみが
「我」があるといわれます。蓮如上人の「仏
法は無我」とか、大峯頭師の「信心の人には
我がない」というところの「無我」は、「信
心」とは「私のこころ」は一切関与していな
いことを意味しているのであり、決して「信
心」を我が物にしないようにという意味が込
められているのではないのでしょうか。

宗祖親鸞聖人報恩講 のご案内

日時 十二月十八日(日)

午後一時から午後四時

日程

一三：〇〇

おつとめ

御本興作法(音楽法要)
正信偈(行讃) 六首引き

一四：〇〇

お話(住職)

一五：〇〇

記念撮影・団樂

一六：〇〇

恩徳讀



写真：山口格夫氏のフェイスブックより

現世利益和讃について

十二首目

続き

がんだりきふしぎ しんじん

願力不思議の信心は

だいぼだいしん

大菩提心なりければ

てんち

あくきじん

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

南無阿弥陀仏は私を樂にする

このように、南無阿弥陀仏を称える人は、阿弥陀さまに護られるだけでなく、いろいろな神々にも護られると言われているのが、「現世利益和讃」です。この世を終わってからではなく、この世に生きていくうちからすでに護られるのです。この苦しい現世の真ただ中で護られるというのが、お念仏のご利益です。寝てもさめても、たくさんのもことによって護られているから、たくさんのご利益があるのです。具体的には、まず息災延命である、長生きができるということです。お金を信じている人は本当の長生きはできません。「あの人は大金持ちで百歳まで生きていた」と反論されるかも知れませんがそれはその人を外から見た人の意見です。その人自身の心は、このお金を他人に取られまいという心であったかも知れませんが、一日たりとも安らかな日はなかったとしたら、その百歳は本当に長生きだったと言えるでしょうか。不思議に生かされていくという自覚がなかったら、本当の長生きはありません。お金を持つて百歳まで生きた人が、死ぬことはどうしても

嫌だと思っていたとしたら、これは長生きでも何でもないではありませんか。

何度も申すことですが、お棺の中に菊の花などは入ってきて、日頃自分が頼りにしていたものはみんなお棺の外です。あれを見たら、普段自分が大切だと思っているものは、最後には何の頼りにもならないということがよくわかります。私たちは、死ぬのはまだまだ先だと思っていますが、ひよつとしたら今晩かも知れません。それでもお念仏があれば、たとえ今夜命が終わろうとも、自分は仏になる人生を生きさせてもらったと言えるのです。人間の考えでは、私たちの命はたかだか百年ですが、死なない命になるのだという阿弥陀さまの教えを聞いたからこそ短い命は元から無限の仏さまの命の中にあつたことに気づかされるのです。浄土真宗とは、このことに気づいた人の人生そのものに他なりません。

信心よるこぶそのひとを

如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり

仏性すなはち如来なり

(『註釈版聖典』五七三頁)

『華嚴經』や『涅槃經』に基づくこの和讃に言われているように、阿弥陀如来を信じお念仏をよるこぶ人は如来に等しいのです。煩惱具足罪惡深重の凡夫であっても阿弥陀さまにまかせたら、その人の心は如来さまと等しい。これはつまり、その人は死なない命をいただいているということです。阿弥陀さまがそのようにおっしゃっているのです。信心というのは、凡夫が仏さまと同じ命を共有するという出来事です。共生と言ってもいいでしょうわれわれが生きているというのは、実は如来さまの命を生かさせてもらっているということです。

如来さまは如来さまの無限の命を生きていても、私は一人で死ななければならぬと思うのであれば、それは信心ではなく疑い心

であります。

信心は私の心ではなく、私の心に来てくださった。如来さまの心です。私たちが、私は信心があるとか、あの人は信心がないとかいう時は信心をすでに凡夫の心に翻訳してしまっているのです。私だけが持っている特別な心であればそれは真実の信心とは言えません。すべての人に与えられるところの同じひとつの如来さまの心を、私がいただいたということが信心です。

だから、信心の人には我というものはありません。煩惱はあっても我がないのです。ここをしつかり味わいたいものです。煩惱を我だと思ひ違いするから、腹が立つからだめだとか、死にたくないと思っているからだめだという話に戻ってしまうのです。ありがたく生かさせていただいたという心は、決して我の心ではありません。あるいは、煩惱を持続のまま仏になるという教えを信じた人には、もう我がないのです。

助けると言われている如来さまの言葉を、疑わずに信じるということは、自分をすっかり忘れて如来さまの心とひとつになったという他に他なりません。

私たち凡夫にはいつまでも我があつて、如来さまだけが我のない尊い心を持つていらつしやるというだけであれば、如来さまと私はいつまでも離れたままです。人間は、親子や夫婦と言っても、我を張っている限り心は一つになっていません。結婚した時は一つの心になったような気がするのですが、もし結婚して一心同体になれるのなら、別れることなどないはずで。しかし、世の中を見ると皆別れていきますね。もし、信心が

そういう人間の心の可能性に過ぎないとしたら、そんな心を得たところで決してお浄土には往けないでしょう。行く先は地獄に決まっています。何もしなくとも、ひとりで地獄に転落して行くのです。死ぬのは嫌だと思つて死んでいく人は、お先真っ暗です。信心のない人は、自分が死んでどこへ行くのか決してわからないはずで。ゴッホと別れてタヒチ島へ行ったゴーギャンという画家がいますが、彼の有名な作品に、「われわれはどこから来たか われわれはどこへ行くのか われわれは誰なのか」という題の絵があります。これは、人間存在そのものの大きな謎を万人につきつけた言葉です。人間ならこの謎をつきつけられたら平気でいられるわけではないのです。心配でならないはずなのですが、それにもかかわらず忘れるか、忘れたふりをして生きているのです。そんな気味の悪いことを考えるのはやめておいて、もっと希望を持つて前向きに行こうとか言つて、この問いをかわして生きているのが普通です。しかし、この問いはどこまでも私たちを追いかけてきます。他人から出される問いではなく、自己自身の内部から出てくる問いだからです。ところが仏法を聞いたら、この問題は私が解決する前に、阿弥陀さまがとつてに解決してくださつていたということがわかるのです。私たちがお浄土に生まれるということです。私たちが生まれてくる前にちゃんと決めて、私たちが安心できるのです。それ以外に安心する方法はありません。

歳をとつて何もかもわからなくなつたら安心できるかと言つと、そうでもないようです。これを解決できるのは、人間ではなく仏さまだけです。阿弥陀さまは私たちに代わつて、私たちがこの世に生まれる前に、これを解決してくださつてくれるのです。私

たちが、如来さまと同じ無限の命に生まれて仏になるようにしてください。阿弥陀さまがおっしゃる言葉が、南無阿弥陀仏の名号です。

この大安心にどのようにしたら入れるかというと、我を忘れて阿弥陀さまにまかせた時に入るので。これを「信心決定」と言います。名号を聞かずに安心することはできません。信心を得たら、私はお助けいただくのだという喜びが湧きます。不思議に肩が軽くなるのです。

私の村に、良く聴聞される男性の方がおられます。昔はあまり参られなかつたのですが、中年以後、どういふ訳かお聴聞されるようになりました。特に仏教について学ばれた人ではありませんから、仏教用語はよくわからないだろうと思うのですが、とにかく阿弥陀さまに助けられるということはおわかつておられるのです。ところが、その方の奥さんはあまりお参りされません。奥さんは阿弥陀さまよりもどうも息子さんを信じているようです。息子さんは一流大学を出て銀行に勤めていて、母親としてはその息子が頼りなのでしょう。だからあまり本堂には来ないのですが、ある日ご主人が「お前も一度お寺に参つて仏法を聞けよ。楽になるぞ」と言われたそうです。これはとても実感のある言葉ですね。説得力があります。

我を張つて生きるのはしんどい人生です。うちの息子は優秀だという思いは、どこか我を張つていますね。心が固くなつています。奥さんのその様子を見て「仏法を聞いたら楽になるぞ」と言つたご主人には、やはり喜びがあつたのでしょう。いつもあるわけではないにしても一瞬はあるわけです。阿弥陀さまのことを忘れていた間はまた煩惱が湧くのですが、思い出したらこの私が助けられるのだとまた楽になる。忘れることはあつても、一度その喜びの心

が湧いたら、その心はもう二度と消えることはあり
ません。煩惱に覆われることはあっても、一瞬湧い
たその心はその人生を貫いてずっと相續していくの
です。なぜなら、その心は凡夫の我の心ではなく如
来さまの心だからです。信心というのは如来さまの
心だから、ひとたび起きたら消えたりしないので
す。だから信心を失うというようなことはあり得ま
せん。

南無阿弥陀仏は、阿弥陀さまが私たちに向かって
おっしゃってくださる言葉です。人間が言い始めた
言葉ではありません。私の口から出るにもかかわら
ず、それは如来さまが私に向かって言われている言
葉です。お前は一人で死ぬのは嫌だ、死んだらど
うしようと思っているかも知れないが、そんな心配
はまったくいらぬ、そのことはもう解決済みだとい
う言葉です。だからその南無阿弥陀仏を信じ称え
ている人は死ぬことがないのです。ところが、自分
の思いを信じている人は、百歳まで生きたところで
若死にです。百歳になっても「まだ死にたくない」
と言いながら死ぬなら、そこには満足がありません
から若死にでありましょう。二百年生きようが三
百年生きようが、満足がなければ若死にと同じこと
ではないですか。南無阿弥陀仏を信じ称えている人
は、定業中天、つまり若死にということはないと阿
弥陀さまは言われるのです。これは永遠の真理です
自分の行き先がお浄土であることを知っている人
は、たとえ世間の知識や学識はなくても智者だと、
蓮如上人は言っておられます。

それ、八万の法蔵をしるといふとも、後世をし
らざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道
なりといふとも、後世をしるを智者とすといへ
り。
(『御文章』第五帖第二通
『註釈版聖典』一一九〇頁)

あなたは死んだらどこへ行くのですかと聞かれた

ら、「阿弥陀さまのお浄土に決まっています。阿弥陀
さまがそうおっしゃっていますから」と言える人
は、もう阿弥陀さまの智慧をいただいた人なのです
どれだけ聖教のことを知っていようと、この大事な
ことを知らないのなら愚者と言う他ありません。

この「後世」という字は「ごせ」と読みます。

「こうせい」とも読みますが、その場合は「後世に
名を残す」などと言うように、歴史的時間のなかでの
未来のことです。つまり、他者に対した世界のこと
です。しかし「ごせ」はこの世とは別の次元です。
いつか申しました自己自身に対する世界、対自性と
いう真の自己の世界のことです。仏さまとつながる
自己の世界を指します。お浄土に生まれるというこ
とを阿弥陀さまに教えられて、そのとおりだと思っ
ている人、つまり阿弥陀さまを信じている人は、賢
く尊い人です。神々が敬い護るのはそういう人のこ
とです。善き神だけが護るのではなく、悪鬼のよう
な恐ろしい神さえも、お浄土に生まれる信心の人を
護るといのが念仏のご利益です。

「南無阿弥陀仏をとなふれば この世の
利益きはもなし」と言われているように、こ
れはお浄土に生まれてからではなく、こ
の世で生きているうちからいただくご利益
です。お浄土に生まれたら護られるのでは
なく、護る仏さまになるのですから護られ
るとは言わないでしょう。お浄土に往つた
ら、今度はまだ迷っている人を助ける還相
回向のはたらきをするのです。

仏法に遇うということは、なかなかできること
ではありません。特に現代のような時代ではいろ
んな障がいのために遇えずにいる人はたくさん
います。そういう不幸な末法の時代に私たちが
仏法に遇えたというのは、宿善があったからであ
って、自分はそのから偉いのだと思っ
てはいけません。私

たちは阿弥陀さまに捕まえられたから、仏法を聞く
ことができたのです。

宿善とは、この世に生まれる以前の世で縁があつ
たということです。たとえば、私の子どもの頃はお
寺の近くに農家があつて、牛を飼っていました。

「モウ」と鳴く声がよく聞えたものです。その牛は
お寺の鐘を聞いていたのでしょうか。その宿善で、
牛が今度は人間に生まれて法座に座しているとい
うことがあるかも知れません。牛のままだったら、説
法の言葉を理解することはできないでしょうが、人
間に生まれたらできます。私の家には、賢い猫が十
七年おりました。報恩講になると、庫裡から本堂に
出て来てお参りの人々を順番に見て回っていました
が、検分が終わるとお説教を聞かないで庫裡に戻つ
て眠っていました。とうとう一度も仏法を聞くこと
はありませんでした。たまたま私がドイツに行く日
に死んでしまいましたので、子どもたちがお葬式を
して、合掌させて埋めたそうです。きつと今度は人
間に生まれて、どこかのお寺の本堂に座しているこ
とだと思います。そんなことを言っている私自身も
ひよっとしたらどこかのお寺の近くに住んでいた牛
だったかも知れませんが、裏山のお猿だったかも知
れません。

元に戻しますと、南無阿弥陀仏を信じ称える
人は善神だけでなく悪鬼にさえも護られる
のです。仏法の敵であるような悪鬼もまた
念仏の人を護るところが、仏教の思
想のすばらしさです。炎魔大王ですら念仏
者を護るのです。つまり念仏を信じ称えて
いる人には、この世に恐ろしいものなど何
もないということです。

『生命環流 浄土和讃を読む下』大峯顕氏著

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

宇都宮頼綱と北条泰時

①『教行信証』後鳥羽上皇批判の記事

『教行信証』には親鸞を流罪にした権力者後鳥羽上皇を、全面的に否定しているかにみえる記事があるけれども、それは後鳥羽上皇が処罰の正しい手続きを踏まなかったことを非難しているに過ぎないと読むべきだ、ということを書きました。この記事をもって「権力者と闘う親鸞」像を作ることには誤り、ということなのです。

②後鳥羽上皇の佐渡ヶ島配流

後鳥羽上皇は承久の乱（一二二一）で幕府方に敗れ、佐渡ヶ島に流されました。流したのは鎌倉幕府の執権北条義時です。当時の常識からいえば、臣下が上皇を流すなどというには前代未聞に近いできごとです。しかし義時は断固としてその方針を貫きました。義時は三年後の元仁元年（一二二四）に亡くなるのですけれども後を継いだ泰時もその方針を受け継ぎました。

流罪というのは、四、五年経つと赦免して京都へ呼び返し、もとの地位に戻すというのが暗黙の了解事項でした。貴族たちはしきりに幕府に後鳥羽上皇の赦免を願いました。泰時は個人的な性格、さらには彼が置かれた状況もあって、政治は協調主義で行っていました。しかし後鳥羽上皇だけは許しませんでした。上皇は十

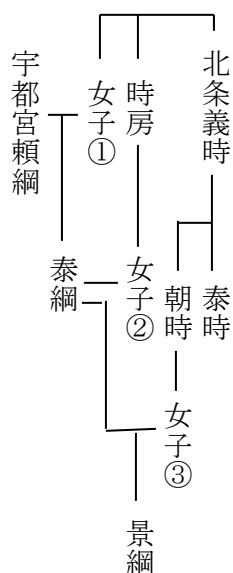
七年も佐渡ヶ島で暮らし、その地で亡くなってしまうしました。

親鸞が『教行信証』を著わしたのは元仁元年のことでした。稲田にいる親鸞にも、幕府の後鳥羽上皇に対する断固たる処断は伝わっていたはずですが、親鸞が上皇批判の文章を記入したのは、このような政治的雰囲気も背景にあったろうと私は考えています。それは稲田が宇都宮頼綱の支配下にあったことが大いに影響があるでしょう。

③北条泰時の義理の叔父宇都宮頼綱

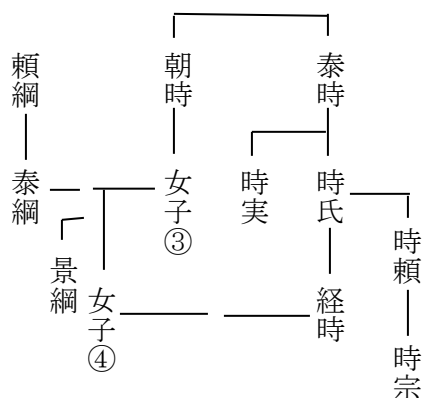
宇都宮頼綱は、以前に述べましたように、法然の最晩年の門弟で実信房蓮生という法名を与えられていました。法然没後は、法然の門弟である善恵房証空の指導を受けていました。証空は浄土宗西山派の派祖とされる人物です。頼綱は親鸞を稲田に招いたと推定される人物でもあります。そして頼綱は北条泰時と非常に親しかったのです。

宇都宮頼綱の正妻は、北条義時の妹（左記系図の①の女性）です。すなわち、泰時の叔母です。そこに生まれた頼綱の嫡子泰綱は、泰時の従兄弟ということになります。泰時は一一八三年生まれ、泰綱は一二〇二年生まれですから、年齢差は一九年あります。



④泰時と頼綱の婚姻関係

泰時は、一族の中でもっとも頼りにしていた叔父時房の娘（系図の②の女性）を泰綱と結婚させました。そこには子どもが生まれませんでした。泰時はさらに自分の弟の朝時の娘（系図の③の女性）と結婚させました。ここに一二三五年に生まれた男子が、泰綱の嫡子景綱です。



ところで、泰綱と朝時の娘との間には、一二四四年ころに生まれた女子がいました（系図の④の女性）。一二三二年誕生という説もありま

す。彼女は三歳の一二二六年、同じ年の北条経時と婚姻しました。経時は時氏の長男ですが、この婚姻は泰時の計らいでした。

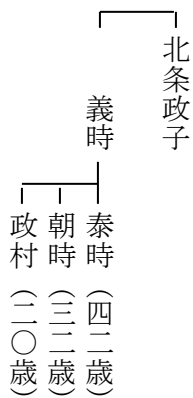
⑤泰時の息子たちと孫たち

泰時には男子がもう一人いました。時実です。彼は次男ですが、当腹の嫡子でしたので、泰時の後継ぎの立場でした。武士の慣行では、正妻の息子（多くは長男）が後継者の権利を有していました。これを当腹の嫡子といいます。そのころ「当」は「現在」という意味でしたから、「当腹の嫡子」とは「現在の正妻の腹から生まれた息子で、夫の後継者になる権利を持つている者」ということになります。

しかし時実は一二二七年に家臣と争って切り殺されてしまいます。まだ一六歳でした。でもこの事件によって泰時のあとは時氏が継ぐことが確実視されたはずですが、ただ時氏は泰時に先だつて亡くなつてしまいましたので、執権に就任することはありませんでした。時氏の嫡男が経時ですから、後に泰時のあとに執権職を継ぎました。しかし経時も早死にし、弟の時頼があとを継ぎました。

⑥ 不安定な立場の北条泰時

北条氏の中における泰時の立場は、必ずしも安泰ではありませんでした。一二二四年に父義時が亡くなった時、後継者の立場にいたのは弟の政村でした。それは母の伊賀局が義時の正妻だったからです。義時が亡くなった時、泰時は四二歳になっていましたが、当腹の嫡子ではありませんでした。



泰時は父に信頼され期待されていましたが、不思議なことに、母が誰であつたかまったく分かっていません。義時の最初の当腹の嫡子は、泰時誕生後に結婚した妻（名前は「姫の前」）から生まれた朝時でした。

しかし朝時の母の実家比企氏は、北条氏と戦つて滅びました。姫の前も結婚生活を続けることができず、離婚して京都に去りました。

義時はその後加賀氏の娘（名前は「伊賀局」）と結婚しました。そこには男子が生まれその子が当腹の嫡子となりました。政村です。彼は義時が亡くなった時、二〇歳になっていました。でも鎌倉幕府を必死に維持しようとする伯母の北条政子は、すでに政治的・軍事的に百戦錬磨になっていた泰時を後継者を選びました。経験の浅い政村では幕府の指導者になるのは無理だろうと判断したのです。他の豪族も交えた暗闘の末、当腹の嫡子政村を抑えて、泰時が執権職に就きました。

朝時も政村もそのまま据え置かれましたが、政村を執権にするべく努力した伯父の伊賀光宗は信濃国に流されてしまいました。

⑦ 頼綱の弟塩谷朝業

翌年の一二二五年、北条政子はある信頼できる僧に伊賀光宗の様子を見に行ってもらいました。泰時に反抗する気配がないなら、鎌倉に戻してもとのように幕府政治に参加させようとの意図がありました。何といつても、執権職に就任する権利があつたのは政村です。それを押し退けて泰時を執権にしてしまったのです。政子は早く仲直りしたかったのです。政子にとって幸いなことに、光宗は泰時に忠

誠を誓いました。その報告を政子にもたらした僧は、法名を信生、俗名を塩谷朝業といいました。宇都宮頼綱の弟です。頼綱は朝業と二人三脚で宇都宮氏の発展に努力していました。朝業は鎌倉幕府第三代将軍実朝に仕え、その厚い信頼を得ていました。承久元年（一二一九）に実朝が暗殺された時、朝業はその死を悲しんで出家しました。その後、兄の師匠の証空の門に入りました。また法然没後の門弟という意識も強く持っていたようです。

朝業の出家に当たり、稲田を含む常陸国笠間郡は朝業の次男時朝に与えられました。すなわち笠間時朝です。

宇都宮頼綱
塩谷朝業——笠間時朝
稲田頼重

政子と泰時はまもなく伊賀光宗を鎌倉に呼び戻し、幕府政治に復帰させています。また朝時はずつと泰時に従順でしたが、朝時の数人いる男子は自分たちの家（名越家といいますが）に反抗し続け、何人も殺され、また流されています。泰時は政治的にも、一族の中でも不安定な立場にいました。その時に強く頼りにしたのが伯母の政子であり、義理の叔父の宇都宮頼綱だったのです。泰時の考えは、さらには幕府の方針は速やかに頼綱の領内に伝わっていたはずですが、後鳥羽上皇に対する方針も、親鸞は容易に知り得ていたのです。

⑧北条政子の年忌法要

北条政子は嘉禄元年（一二二五）に亡くなりました。泰時はその葬送の法要、続いて翌年の一周忌、二年後の三回忌の法要を盛大に行いました。政子の権威は絶大でしたから、その法要といえど誰も逆らえません。皆、参列します。法要を主催する泰時の立場は強化されるということです。政子の法要には、そのような政治的意図があったのです。

三回忌後、次の七回忌まではかなりの時間があります。そこで泰時が計画したのが一切経の奉納でした。嘉禄三年（一二二七）から翌年にかけてその動きが具体化しました。

⑨一切経校合事業

一切経とは「經典すべて」という意味です。一切経という經典があるわけではありません。經典は全部で二万巻以上あるといわれていますが一切経奉納といえど実際には五千数百巻が奉納されるのが普通でした。奉納の目的は主に亡くなった人の追善供養でした。

一切経を整え、新たに書写して奉納すればさらに功德があると考えられていたようです。でも經典類は書写で伝えられていましたから、誤写もありました。そこで同じ經典を何点も集めて間違いを正さなければなりません。それを校合といいます。それは大変なことでした。まず多数の經典に精通し、どれが正しいか判断する識見を持った僧が必要です。また年単位の期間が必要です。

⑩『口伝鈔』の記事

政子追善供養の一切経校合の書写・奉納は、



泰時にとつては国家的事業です。それを続ける限り、泰時の立場は強化され続けます。期間は長い方がいいのです。では一切経校合をどの僧に任せたらいいか。

泰時は必ずや頼綱にも相談をもちかけただろうと思うのです。そこに『教行信証』を執筆して間もない親鸞が浮かび上がって来たのでしよう。この書物を執筆する過程で、親鸞が多数の經典類を参照したことは明らかです。その実績の上に立って、頼綱は親鸞を泰時に推薦したのだらう、それが覚如の『口伝鈔』に出た一切経校合の記事になったのだらうと私は推定しています。

宇都宮頼綱について

NHK大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』では、登場することはありませんでしたが、源頼朝とも北条家とも縁が深く、鎌倉幕府に忠誠を誓う一人でもありました。その頼綱の生涯を少し覗いてみたいと思います。

治承二年（一一七八）に宇都宮業綱の子として誕生。源頼朝の乳母であった寒河尼に預けられ、その夫・小山政光の猶子となる。文治五年（一一八九）の奥州合戦で功績を立てる。宇都宮家を継いでから建久五年（一二一四）には北条義時の子・金剛

（後の北条泰時）の元服の儀に参列する。頼朝の死後、正治元年（一一九二）に夭逝した頼朝の次女・乙姫の葬儀に供奉し、その十月には有力御家人と共に梶原景時の変で景時弾劾に参加する。その後、元久元年（一二〇四）、伊予国の守護職を与えられた。翌年畠山重忠の乱が起き、北条氏側に加担。しかし、姑にあたる牧の方と北条時政が三代鎌倉殿・源実朝の殺害を謀った「牧氏の変」が発生し、北条時政は出家（ドラマでも画かれた）。頼綱自身も謀反の嫌疑が掛けられ、北条義時に討伐されようと言われました。従兄弟の小山朝政は討伐を断り、頼綱に話して、謀反の意が亡い書状を、小山もその旨であることを添えて、鎌倉に届け、一族郎党六十余人で出家しました。そして鎌倉に行き面会を求め一度拒絶されますが、結城朝光を介して献髪し陳謝の意を表して面会を許され、京都嵯峨野の小倉に庵を設け隠遁しました。法名は実信房蓮生で、その後、法然の弟子の証空に師事しました。浄土宗に帰依した頃よりその潤沢な財力をもつて京常盤や宇都宮、桐生などに念仏堂を建てました。承久三年（一二二一）承久の乱が起きた際は、鎌倉留守を務め、嘉禄二年（一二二六）には北条泰時の要請により、泰時の孫・経時と頼綱の孫娘の婚約が実現するも、寛元三年（一二四五）に孫娘は早世、翌年経時も病死しました。嘉禄三年（一二二七）に発生した嘉禄の法難の際には、延暦寺の僧兵から法然の遺骸を守るため、頼綱（蓮生）、弟の信生（塩谷朝業）、法阿（東胤頼）、道弁（塩谷七郎）らと東山の法然廟所から二尊院までの遺骸移送の護衛にあたった。

また、京都では、藤原定家と和歌を通して親交が厚く、娘を定家の嫡男・為家に嫁がせている。

嘉禎元年（一二三五）、頼綱は定家に依頼して、小倉の山荘の障子（当時は襖のことを障子と言ったとのこと）に歌の色紙を贈ってもらい、貼ったそうです。それが「小倉百人一首」になっていったとのこと。（ウィキペディア参照）

稱讃寺 行事予定

二〇二二年 一二月の行事予定

六日(火) のんのん法話会 休座

一六日(金) のんのん法話会 一四時

一八日(日) 宗祖親鸞聖人報恩講 一三時

二六日(月) のんのん法話会 一四時

※住職は、十二月二十九日(木)から
一月四日(水)まで、鹿児島・稱讃寺
に滞在しております。

終わり方

始まり方を決める

二〇二二年「心のともしび」十二月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 〇1000-4-69957
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店
番号 当座 〇〇69957
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

旧統一教会への多額献金を強いられた方、並びにご家族の救済に向けて、国として動いております。日本では家族が崩壊してでも、財産がなくなっても、献金し続けるのは、日本が朝鮮半島で非道なことをしてきたことに対する贖罪の意味があると聞いたことがあります。教団組織はその情に付け込んで、献金を強要しています。マインドコントロールによって、自分がそれを背負うことが、世界が救われると思いつまされていくのです。被害に遭われたご家族の訴えはわかるし一刻も早く救済され、マインドコントロールされた当人も解放されて欲しいものです。仏教では、三毒の煩惱の一つに「貪欲」があります。お金を多く持ちたいと思うのが、私たち凡夫であります。だから、手放したくないし、損をしたくないと思うのですが、多額の献金をするというのは、ある意味、当人は、お金への「欲」がなく、お金に執着していないように思えてしまいます。「貪欲」という煩惱がなくなり、善かれと思いい行い、幸せのほずなのに、逆に周りを苦しめ不幸にしまつていきます。人の情につけ込む教団組織は、「我らは善、汝は悪」と考えております。金子大栄師は真宗人(念仏申す人)は生活意識において「善といつても悪といつてもすべて煩惱であり、罪の深い生活であると感じておるのであります」(金子大栄全集下より)とおっしゃっております。